Vincent van Gogh
を讃えて
富永 厚
Vincent

ヴィンセント・ファン・ゴッホ
――サン・レミの糸杉とオーヴェールの蒼い空――

富永　厚

「アルルの病院の庭」
Le jardin de la maison de sanite a Arles, 1889

ゴッホは、わざわざアルルに招いて、同じ一軒の「黄色い家」で暮らしていたゴーギャンと仲たがいの末、自分の片耳をカミソリで切り落とす。それのみならず、ゴーギャンが家に戻らない腹いせにか、それともゴーギャンの身替わりというつもりでか、馴染みの娼婦に、ご丁寧にも自分の耳を新聞紙にくるんで手渡す。これは、よく知られているように、一八八八年一二月二三日、クリスマス直前の出来事だ。まさに衝撃的で、異様な、発作的ふるまいだ。

その事件の直後の暮れから正月の初めにかけてと、短期を含めて後二回ほど入院していたアルルの病院の中庭を、四月ごろに描いた表題の絵が残されている。早春のこと、さすがに大きな樹木は葉を落としているが、南仏アルルの庭には、深紅の草花やそのほかいろいろな色合いの花が咲き乱れ、池には赤い魚が悠々と泳いでいる。二階には、庭を眺めている患者とその家族、看護人など十数名の姿が見える。

ゴッホにしては珍しいほどにぎやかな彩りの絵だ。この絵を見るかぎり、異常な事件があったことなど信じられないくらいだ。何か胸中いっぱいに言いたいことがたまっているかのようではあるが、同時に激烈な情念の嵐が去った静けさもしのばれる面白い絵だ。

ゴーギャンから事件を知らされて、パリから駆けつけてきた弟のテオも引きあげ、ゴッホが独り退院して十日ほどたった一月十七日付のテオ宛の手紙がある（第五七一信）。まだ傷痕が痛むこともあっただろうに、自尊心も働いたのか、一言も触れてはいない。また、ここころの痛みについても、ほとんど言及していない。しきりと、ゴーギャンのことを気にはしているが、同時に彼への当てつけがましい文句も記されている。手紙の大半は、ゴッホが直面している経済的困窮について、ありのままの事実を、支出の明細をつらねて、むしろたんたんと語っているだけのものだ。

しかし、この手紙ほど切なく、哀しい手紙を僕は読んだことがない。

「家政婦の十二月の給料二〇フラン、一月の前半分一〇フラン、入院費一〇フラン、看護人への謝礼一〇フラン、帰宅後に支払った家具等の賃借料二〇フラン、血のついたシーツ等のクリーニング代一二フラン五〇サンチーム、日用品雑費一〇フラン、あわせて　支出合計一〇三フラン五〇サンチーム。それに知人との退院祝いを兼ねての夕食代に手　元の残

りを少々奮発して支出・・・・」

事件の直前、弟から一００フランの送金があり、手持ち分とあわせて一三０フラン少々あったものが、入院費等の思わぬ臨時の出費がかさんだため、生活費をできるかぎり切り詰めようとした日頃のゴッホの気持ちとは裏腹に、彼の財布は完全に空っぽ。しかたなく、ひとから五フランだけ借りて数日間食いつなぐ。テオからおカネが届いたのは、この手紙の日付の一月十七日のことだから、その間無一文のまま、ほとんど絶食に近い状態がつづいていたことになる。

ゴーギャンとの対立・衝突も、ゴッホ自身は両者の芸術上の意見や性格の違いなど、主としておたがいの内部的なトラブルに起因するものと思っていたようだ（第　　信）。むしろかなりの要素は、もっと日常的な経済的なものであったと考えるべきであろう。　もともと何らの経済的裏付けも、見通しもないまま、アルルで芸術家同士の一種の組合――一緒に生活しながら同じアトリエを使って創作活動を展開する試み――を実行しようなどと考えたゴッホの夢が幻想だったのだ。ゴッホの絵は、一枚も買い手がつかない。まだしもゴーギャンのほうは、画商のテオを通じて少しは売れ、それなりの収入もある。ところが、ゴッホと言えば、生活費も絵具代も筆代も画布代も、ことごとく弟に依存し、その仕送りで賄っている。こんな逼迫した状態では、貧乏絵かきの共同生活・共同制作などうまく成り立っていくはずがない。

ゴッホは、全面的に弟の世話になっていることが、つねづね気掛かりでしかたがない。ともかく、ゴッホの絵はまったく売れないのだから収入を得る術もない。いわゆる美術家組合を、世間から認められない新進の絵かきが、たがいに助け合って、良い絵を描くための最良の方策と、ゴッホ自身は信じこんでいるのだ。

しかし、このようなゴッホの無計画、無思慮を責めることができるだろうか。たしかに、彼が人並みの生活力を備え、才覚もきく人間だったら、また世間的分別にたけ、もう少しバランスのとれた性格の持ち主であったなら、もつと違ったやりかたができたことだろう。しかし、もしそんな種類の人間だったら、あれほどすばらしい、ほかの誰にも真似のできない作品を描くことはできなかっただろう。

何とかしなければ、テオの負担を少しでも軽くしなければと、不器用なゴッホはゴッホなりに気をもみ、あれこれ考える。しかし、経費の軽減がはかれはずだとのゴッホの算段とは異なり、現実にはかえってテオの出費はかさむばかりで、改善の余地はない。ゴーギャンと一緒に暮らすようになってから、それまで一回に五０フランずつ送られてきていた金額が、倍の一００フランに増えている。一人暮らしが二人暮らしになれば、家財道具の用意など、それだけ何かと出費がかさむことは理の当然だ。

どうもゴッホは、ゴーギャンにたいして、もっとテオへの十分な理解と、せめてもの思いやりを示してほしいと思っていたようだ。しかし、ゴーギャンにとっては、テオは友人の弟であり、経済的支援者であるまえに、むしろ彼の絵を売りさばく画商である。かりにその好

意や、やりくりの苦労は分かったとしても、血をわけた兄弟同士とおなじような感情を持てるはずがない。それがゴッホには大変に不満であったらしい。

ゴッホの苛立ちはつのる。ゴーギャンとの共同生活も、当初ゴッホが目論んでいたようには、はかばかしくはかどってはいかない。パリでのテオとの生活でも実証ずみように、およそゴッホというひとは、他人と同じ屋根の下で過ごすことは不得手だし、早晩衝突は避けがたい。

ゴーギャンにたいするゴッホの怒りとコンプレックスがしだいに膨れあがる。ゴッホはもともと激しやすく、偏屈で、怒りっぽい癇癪持ちの気難しい感情家だ。ゴーギャンがゴッホとの口論の末、椅子やテーブルを蹴っ飛ばしたり、ひっくりかえしたりして、すぐその場で怒りをぶちまけたように、ゴッホもやりばのない感情を、不燃焼のまま抑えこまずに、うまく発散させることができたら、おそらく狂うこともなかったことだろう。

若いころ、彼を牧師になる気にさせた、純粋で、ストイックな精神、彼自身修道士的だと認めていた心情、それに自己抑制的で、内向的な傾向、それらが二重、三重に彼に足かせをはめる。それになによりもゴッホの心は、あまりにも優しすぎる。

ギリギリまで抑えられた感情は、最後には暴発する。ゴーギャンに向かって、いきなり酒の入ったグラスを投げつけたり、ついにはカミソリまで持ちだしてきてゴーギャンを脅かす。しかし、ゴッホの行動は、そこでピタリと止まってしまう。酒癖の悪い、小心な酔っぱらいの、度を超した悪態やヒステリックな乱暴の類いだ。なんて情けない人間なんだと、愛想をつかされる寸前の、その一歩手前で、怒りの衝動に急ブレーキがかかる。ゴッホは、相手の凝視にたえきれず、すごすごとひきさがる。ここで作動する意志は、他人をあやめないかわりに、みずからをあやめる。

外部へのはけ口を逸した攻撃的エネルギーは、こんどはわれとわが身そのものを標的として突き進まざるをえない。残されているのは、自己破壊あるのみだ。

何かのきっかけで、ひとたび制御を失った火だるまの馬車は、あとは坂道をころがり落ちるように、急斜面をくだり、終局へ向かって驀進していくだけだ。

「糸　杉」　Les cypres

子供のころ、よく自分で竹トンボを作って、野原で飛ばしたものだ。手のひらのなかで心棒を手もとにしぼりこんでおいてから、勢いをつけて前に押しだしてやると、ヒューッと空に向かって急上昇していく。

ゴッホの糸杉を見ていると、竹トンボみたいにいまにも大地を離れて、宙に舞いあがっていきそうだ。幹も枝も葉も、ねじれにねじれて、梢へ、そして空へと一斉に巻きあがっている。

一八八八年一二月の事件の後、翌年五月初めにゴッホは、アルルから北東三０キロたらずのサン・レミの精神病院に入院する。それから二カ月ほどたった、六月二五日付の弟テオに宛てた手紙で、ゴッホ自身糸杉についてこう語っている。

「いつも糸杉が気になってしかたがない。僕はそれをひまわりの絵と同じようなものに作りあげてみたいのだ。というのも、おどろくことに、僕が想うように糸杉を描いたものがひとつもないからだ」。（第五九六信）

ゴッホは、目の前にそそりたつ糸杉を、キャンバスのうえいっぱいに、肉眼に見えているようにではなく、心に観じ、胸中に想い描かれるがままに、魂の心眼がとらえた本質さながらの形と色で、躍らせたかったのだろう。

しかし、もしかすると、あの螺旋状によじれた糸杉は、ゴッホ自身なのかもしれない。しつっこいまでによじれによじれた糸杉の奇妙なフォルム・・・、屈折に屈折を重ねた精神、もしくはいりくんだ情念の反転・・・。身もだえ・・・。

ゴッホを「炎の人」と呼ぶことが多いが、彼の「糸杉」をみるかぎり、むしろ炎になりきれず、ブスブスと煙りを巻きあげて、いつまでもくすぶりつづけながら燃えている――そんな感じがしてくる。

南仏プロヴァンスの季節風―ミストラルにあおられて、糸杉の密生した葉がざわめき、枝がきしむ響きは、抑えに抑えた感情が、自己抑制のオモシをはねかえして、底の底から吹きあがってくるゴッホ自身の心の自然の叫びではないだろうか。ゴッホが描く糸杉には、まるで彼そのものがのりうつっているかのようだ。

野望と抑制、愛情と憎悪、傲岸と謙遜、自負と依存、希望と挫折、粗野と聖性、栄光と悲惨、二つの相反するものが、真っ向から対立しあいながらも、たがいにからみあい、よじれあっている、すさまじいばかりのゴッホの内心の葛藤・・・。テオに言わせると優しい、繊細な心と、非人情で、我儘な心とが交互に現れてくるようだという、ゴッホの存在そのもののもつアンビヴァレンツ、それがあの「糸杉」なのではないだろうか。

「自画像」　Autoportrait

ゴッホは、サン・レミの精神病院に入院する以前から、自分の将来についていろいろ思い悩んだようだ。絵も売れず、またいつ発作がおそってくるかも知れない不安をいだきながら、おカネもかかり、自由も保証されない病院に入って、ひきつづき結婚したばかりの弟の厄介になるのか、それとも別な人生をはじめるのか・・・。

「余分な支出が必要となる変化や引っ越しを、たいへん恐れている」と、ゴッホはテオに書いている（第五七一信）。むろん、絵についての自信をなくしてしまったということでは

ない。だから、その一方で「これまでの費用を、きっと描きあげた絵でとりもどすことのできる結果になるであろうことを、辛抱づよく信じている」（同一月十七日付）。　テオと共同で所蔵していた、ゴッホもお気に入りの画家モンティセリの描いた「花束」が、五〇〇フランで売れているのだから、彼の「ひまわり」だって売れていいはずだ。でも、実際にはゴッホのひまわりの買い手は一向に現れない。

そこで、彼は考える。絵のよしあしや、ほんとうの値打ちにしたがって売れたり、売れなかったりするのではなく、多分に運・不運によるのだと・・・。このあたりのころから、ゴッホの手紙には、運・不運、幸・不幸という言葉がよく出てくるようになる。いくぶんは、自分の絵が認められない不運・不幸を、みずから慰めているようなところもあったのだろう。しかし、それ以上に、彼自身の人生のありようを、ツキのあるなし、あるいは自分ではどうすることもできない、運命のめぐりあわせとして受け止めていたふしがある。　「現在の世の中では、僕ら芸術家は、とっ手の壊れた水差し壷にすぎない」（第五七九信、三月十九日付）。

そこで、精神病院に入るかどうかを、決めなければならない直前になって、彼は外人部隊に入ることを考えだす。「もし五年間外人部隊に従軍する何かの手蔓があったら、入隊しようと思う。・・・たとえどうなるにしても、もし僕を受け入れてくれるのであれば、外人部隊にいくつもりだ」（第五八九信、五月二日）。

いよいよ入院する直前になっても、くりかえしゴッホは書いている。「僕のような奴らは、実際に外人部隊に入れるのが至当というものだ。・・・このことは、ほんとうに、ほんとうに真剣な話だし、・・・僕は兵役につくことができると思う」。

背嚢を背負い、銃を肩にかついだ外人部隊一兵卒、フィンセント・ファン・ゴッホ二等兵なんてまるで漫画だ。考えても見るがいい。三十六歳の彼から絵をとりあげて、いったい何がのこるだろう。気が小さく、神経質で、痩せ、くたびれた、役立たずの中年のただのオッサン。

映画「モロッコ」に出てくるような、ちょっとニヒルで、いかす青年、金持の放蕩息子のなれの果てならまだしも、ゴッホにはおよそ兵隊姿は似合わない。熱砂の兵舎の庭を、上官にどやされながら、汗をかきかき、ヨタヨタと走りまわっているゴッホなんて、滑稽でグロテスクなだけだ。

むろん、ゴッホは大真面目だ。狂気でものごとの判断がつかなくなっているのでもないし、結婚したてのテオに、妙な底意の嫌がらせや当てつけを言っているのでもない。むしろ、正真正銘これ以上弟に迷惑をかけつづけるのが、耐えがたく、しのびないのだ。だから、病院もできるだけ費用がかからないものを選ぼうと気をもんでいる。彼は真剣だ。真面目さも度が過ぎると、ときとして災いをもたらす。

彼の描く絵は、そのひととなりそのまま、真正直で、見るものを息苦しくさせるばかりの切迫感がみなぎっている。装飾として飾るには、あまりにも重すぎる。それに、太陽の降り

注ぐアルルに来て、どんなに明るい絵具で描いたとしても、北國のオランダの田舎町育ちで、宗教色のぬけない彼の絵には、どこか鈍重で、土臭い、暗い陰翳がつきまとっている。そのためもあって、買い手がつかないだけでなく、けっしてうまくもなく、洗練もされていない彼独特の絵は、美術批評家たちからも理解されることがない。絵で暮らしを立てていくことも、弟の厄介にならず自立することも、まったくおぼつかない。だから、外人部隊に身を投じることが、唯一の解決策なのではないか・・・。

ほんとうのところは、それでも彼は絵が描きたい。描かずにはいられない。どんなに大変でも、不安がつきまとうにしても、また新婚そうそうの弟夫婦に負担と迷惑をかけつづけるにしても、さらには、ついにはみずからの存在そのものを破滅の淵に追い詰めることになるにしても、彼は絵筆を捨てることができない。

その後のゴッホは、みずからの身体と精神の消耗を代償として作品をつくりだしていくみたいだ。彼は身体と精神を使いはたし、すりへらす。オスロの美術館にある彼の最後の自画像の一点は、さながら亡霊のようだ。あの彼の描く画布の上の、ゴテゴテした油絵具の皮膜は、ゴッホ自身から削りとられた身体と精神そのものの一片であり、一部分であると思うべきであろう。それは、彼の脂であり、失われた血潮であるとさえ言えるかも知れない。

なんと悲惨なことだろう。しかしまた、なんと壮絶なことだろう。ゴッホの絵の前に立つとき、戦慄が僕の全身をつらぬく。同時に、言いようのない痛みが、肺腑をよぎる。

「アイリス」

Les iris, 1889

ゴッホが入院したサン・レミの病院は、かつてはサン・ポール・ドゥ・モゾール（Saint, Paul-de-Mausole）と呼ばれた修道院だった。ゴッホが入ったときも経営は、カトリック系のボンゼス（bonzesse）、つまり尼僧（修道女）によって行われていたようだ。ボンゼスとは、「坊主」のフランス語ボンズ（bonze）が女性形化したもので、日本語にもどして言えば、「坊女主」とでもなるところだろう。いささか奇妙ではあるにしても、少々愛嬌のある言い方でもある?と言ったら、顰蹙をかうことになるだろうか・・・。

ゴッホは、二十代の半ばに、牧師だった父親同様、一時プロテスタントの（日本風に言えば牧師心得とでもいうべき）臨時の伝道師になる。ベルギー南部の炭鉱地帯ボリナージュで、坑夫たちに布教を行い、住民たちをカトリックからプロテスタントに改宗させようと骨をおる。支給される手当をことごとく、貧しい信者である炭鉱夫やその家族のために使い果たし、自分はあばら家の藁のなかに寝て、乞食同然の生活に甘んじている。

このような常識破りの徹底ぶりが、教団から非難を受け、わずか六カ月で職を解かれる。社会の中で、ひとつのエスタブリッシュメントとして存立し、機能しているキリスト教の実態は、改革派を名乗っていても、ゴッホが追い求めた純粋に精神的な信仰とは相いれないものになっていたのだ。あまりにもイノセントで、ひたむきで、一本気なゴッホは、既存の教会組織の陰の部分と衝突し、その自己保全的なむごたらしい現実に、苦い、二度と再帰しがたい失望を経験する。

ゴッホは、プロテスタントであれ、カトリックであれ、既成のキリスト教の体裁と形式と教義にとらわれた信仰から次第に離れていく。彼は、もともと遠い天上の神でなく、この地上の人間のあいだでイエス・キリストが、悩み、苦しむ人々を慰め、苦悩を和らげ、癒し、生きる力を呼びさましたような、原初の出発点の宗教、シンプルで真実な信仰を求めていたと言うことができよう。

ゴッホは、トルストイの『わが信仰のありか』（1884年）につづく「新しい宗教論」としてフランスにも、その噂が聞こえてきた『生命について（人生論）』（1888年刊行）に、アルル滞在中、たいへん強い関心を示している。個人の生命は肉体とともに滅びるとしても、幸福を求める人類の生命は生きつづけるという、トルストイの考えに注目を寄せている（第五四二信、五四三信）。こうしてゴッホは、かつてルソーが『エミール』のなかで展開した、非教派的な一種の自然宗教の思想に似た宗教観に近づいていったようだ。

その意味でも、カトリック的な、一定のキリスト教の宗教色にそめられたサン・レミの旧修道院の病院とは、所詮へだたりがうまれざるを得ない。それでも入院したてのころは、近くに人家もほとんどない、周囲の静かな環境や美しい景色がたいそう気にいって、入院してよかったと思ったようだ。

ときに彼は、日の出のはるかまえから目をさまし、病室の鉄格子のついた窓から、南仏の田園にひろがる星空と夜明けの光景を、何時間も何時間もあきもせず眺めつづける。

「なんて美しい土地、なんてすばらしい青空と太陽なんだ！　僕はまだ庭と、窓からの眺めしか見てはいないが・・、（そう思えるのだ）」（第五九三信）と弟に書き送くる。

しかし、おそかれはやかれ、精神病院の雰囲気、患者への対応、診療のありように、不満と嫌悪を感じないではいられない日がやってくる。しまいには、彼は一日もはやい退院を熱望する。ゴッホは、絵具のチューブを飲みこんで、喉を詰まらせるというような自殺未遂をふくめて、二度以上の発作と錯乱に苦しみながらも、まるまる一年のあいだ辛抱してこの病院で生活することになる。

サン・レミで、ゴッホは百五十点をこえる、じつに多くの絵を描いている。外出が許されるようになると、病院の外へでかけていって、糸杉、オリーブ、畑、道、果樹、山、渓谷、採石場など、自然のさまざまの題材を描きまくる。人物の適当なモデルがいないことを嘆いてはいるが、その代わり病室内で、彼の愛好するドラクロワやドーミエ、そして若いころからとくに尊敬していたミレーなど、印象派とは別種の作品の模写を熱心に手掛けている。む

ろんそれは、石版画などの原画そのままを、精密に転写するというのではなく、ゴッホ風の荒く、不細工なタッチで描き変えられてはいるのだが・・・。

農夫たちが麦畑で作業をしたり、刈り取りをしたり、脱穀をしたりしている図柄と、簡明で力強い表現がたいへん気にいっていたようだ。「あらかじめあれが描きたい、これが描きたいなどと言わないで、自然に向かって倦まずたゆまず孜々として働き、あたかも靴をつくるように、いっさい芸術的気遣いぬきで制作するという考えに、僕は次第になってきた」（第六一五信）と、テオに語っている。大地の上で働く人々への共感と、そこに根づいている土着の生活への愛着と郷愁が、熱い感情となって、ゴッホの胸にこみあげてきたのだろう。

ゴッホは、絵は一部のマニアや金持の蒐集家の独占物でなく、ごくふつうの人々にも開かれ、家庭のなかに掛けられて、だれでもが親しめるようなものであるべきだと、考えていたようだ。事実、彼は気前よく、モデルになってくれた人をはじめ、かなり多くの人に自分の作品を贈った。彼の死後、相当な数の彼の絵が、習作を含め、街頭のガラクタ市で二束三文で売られていたということだ。それでも買う人はほとんどなかったという。

サン・レミの病院で描かれた多くの作品のなかで、僕がとくに注目しないではいられないのが、紫色のアイリスの花を描いた何点かである。一連の作品のうちで最初のものは、入院直後、はじめて病院で絵筆をとって庭の花園を描いたものである（第五九一信）。多く花茎のはずれに、一輪だけ白い花をつけたものがふくまれている。それは、精神病院の病室に、独りで暮らしていかなければならない彼自身の姿を暗示しているかのようだ。その後、花瓶に活けられたアイリスを何点か描いている。金色の壁を背景にした花瓶のアイリスは、一茎折れて花瓶の下に垂れ下がっている。最初の花の色のみずみずしいものから、枯れかかって色が変わってしまったものまで、いろいろのアイリスがみごとに表現されている。ゴッホそのひとの気持の移り変わりを示すかのようだ。

これらのアイリスは、どれも躍ってはいない。じつに静かで、寂しげだ。端正で、渋く、清らかだ。病院に閉じ込められたゴッホの無念さが伝わってくる。

絵の専門的なことは僕には分からないが、このアイリスの画法は、日本画のそれにかなり近いのではないかという気がする。油絵具のタッチそのものは、重厚で、けっして淡泊とは言えないだろう。しかし、けれんみや過剰なけばけばしさがない。版画に凝縮した日本画の精神と、そこに内在している自然観を、ゴッホ自身わがものとしたと評してもさしつかえないのではなかろうか。それにしても、ゴッホのはげしい情熱の奥に秘められた苦悩の深淵がかいま見られるような荘厳な作品だ。

ここには、十字架に釘打たれたイエスも、マリアの嘆きも描かれてはいない。青紫のアイリスというどこにでもある植物の一種が描かれているにすぎない。しかし、これはほかならぬゴッホの宗教画であるような気がしてくる。アイリスの青紫の、ゆかしく、気高く、つつましやかな表情が、僕はたまらなく好きだ。この絵を見ていると、こころが浄められ、言い知れぬ慰めがあたえられる。このアイリスの絵から、自然の深みと、生きていることのきび

しさ、それと同時に、美しく、崇高なものをまえにして感じる生きることの静かな感動と喜び、生きとし生けるものへの一種の福音が聞こえてきはしないだろうか。

星月夜の糸杉

Cypres dans la nuit etoilee

サン・レミ滞在の一番最後のころゴッホが描いたこの絵は、まことに不思議な作品だ。

ほぼ真ん中にどっしりと二本の糸杉。この二本は寄り添い、からみあって、一本のようだ。まるでゴッホと弟のテオみたいだ。糸杉の右の空に細い三日月。左は宵の明星か。夜だというのに、画面全体が昼のように明るい。

左手に延々と広がる、伸び放題に伸びた背高の葦の茂み。遠い山並。低い雲。前景の道は二つに分れている。坂を下ってくる二人乗りの馬車。手前右手の広い道を歩いてくる二人の男。農夫なのだろう、右側の男は、シャベルを肩にかついでいる。その隣の手ぶらの男は何者なのか。シャベルの男が日焼けした赤ら顔なのに、光りを背にしているとは言え、左側の男は青ざめていて、顔がまったく識別できない。

道が二又に分れている。三差路の途。後から二人を追いかけるようにして走ってくる馬車は、どちらの途をいくのだろう。二人連れのうちの一人がもっているシャベルは、なぜか墓を掘るためのものでもあるかのようにも思える。連れの一人は、ひょっとしてゴッホ自身なのか・・・。すると、後から死神が馬車を走らせているのか。むしろこの馬車の二人の男女は、吉凶二つの未来を司る運命の使者たちではないのか・・・。《まだ遅すぎはしない。右手の広い道でなく、すぐ引き返して左手の道をたどれば、行き先べつな運命がひらけてくるし、助かるかも知れないのに・・・・・》

二人の男は、後ろを振り返ろうともせず、そのまま自分たちの途を歩きつづけるつもりらしい。その二人の後ろ姿を、真ん中の糸杉がじっと見送る。月と星が光りをふりそそぐ。それにしても、なんと明るい夜だろう。冷え冷えとした大気が、夜空いっぱいに震える。星がまたたき、淡い光が糸杉に散る。

二本の道、二本の樹、歩いている二人、馬車の二人、星と月・その真ん中にそそり立つ大きな糸杉・・幸と不幸、幸運と不運、成功と挫折、繁栄と破滅。可能性としては、どちらもありうるのに、実際にはどちらかへ偏ってしまう現実。しかし、その限界がひとたびもしも超えられたならば、それらの対立項は、糸杉を軸にして回転するであろう。幸は不幸に、不幸は幸に、生は死に、死は生に、そして善は悪に、悪は善に、価値は無価値に、無価値は価値に・・・。

耳をじっとすますと、この画面からも夜のしじまを破る風のうねりが聞こえてくるようだ。

乾いた石ころだらけの道を歩く男たちの足音、その背後に迫る、デコボコ道を疾走する馬車の音、車体のきしむ音、馬のひずめの音、吐きだす息の音。そのようなあれこれの音をかき消すように、枯れかけた葦の穂波をかすめ、糸杉をゆさゆさと揺らして吹き抜ける、潮騒のような風の低音のざわめき、うめき。糸杉のうめき――それはそのまま、ゴッホその人のうめきであり、呼びかけでもあるのではなかろうか。

ゴッホ自身は、後にゴーギャンへの手紙で、この絵について、ロマンティックなプロヴァンス風の光景を描いたものと説明している。しかし、僕にはどうしてもそのようには見えない。手紙に書き添えられたエスキースでは、糸杉も道も一本であること、二人の男たちは実際の絵とは反対に、葦の川辺に沿って左の方へ歩いていることも不可解な謎だ。

この「星夜の糸杉」は、彼の意思を超えて、その後わずか二カ月あまりのうちに、この世を去っていってしまったゴッホの運命を、それとなく暗示しているかのようだ。しかし、考えようによっては、ゴッホにかぎらず、どの途を選ぶか、人生の岐路に立たされている人間だれしもの運命のありようを、示していると言えはしまいか・・・。

麦畑や葦の河原を吹き抜ける風のうずまき、糸杉のうずまき、ゴッホの情念のうずまき、太陽とヒマワリと、そして夜空の光りのうずまき、魂の永遠のうずまき――すべての存在の運命の輪がとどまることなく回転している。このいまを生きる僕たちまでが、いつのまにかそのめくるめくうずまきのなかに誘いこまれ、吸いこまれて、とめどなく回転しはじめる。

この夜の明るさは、いったいどこからくるのだろうか・・・。

「オーヴェールの教会」

L, eglise d, Auvers, 1890

オルセー美術館の最上階、印象派の作品を集めたセーヌ河寄りの一翼の西端、ゴッホの部屋の壁の中央に、この絵がある。（ここにあるゴッホの絵の大半は、彼の死後ガッシェ医師が所蔵していた貴重なコレクションを、その息子が寄贈したものだということだ）。この絵は、縦九四センチ、横七四センチの大きさだが、とても大きく見える。すこし歪んで描かれている、ひしゃげた田舎の小さな教会。その背景のコバルト・ブルーの空が圧倒的だ。

ものすごく濃く、深く、あざやかな青。質量感と深みのある青・・。たぶん、このちっぽけな教会は、石造りながら、このゴッホの空の青の重みを支えきれないのだろう、いまにもガタついて崩壊しそうな感じだ。

この絵に描かれた教会の実物と周辺の麦畑の景色が見たくなって、六月末の晴れた一日、僕は列車を乗り継いで、オワーズ河沿いのオーヴェール・シュール・オワーズに出掛けていった。駅のホームから、建物の一部が間近に見上げられるほどの近距離に、この教会はあっ

た。駅前の通りを右手に一分たらず歩いて、左手の細い坂道をのぼっていくと、小高い丘の中腹の道角に、窮屈そうにそれは立っていた。

このあたりは、パリから鉄道で約一時間、バスやクルマならもっと早く来られる距離なので、小学校の遠足（美術の授業の校外活動）に格好な場所になっているらしかった。幾組もの学校の児童たちがやってきていた。ちょうど、ゴッホの教会の絵の前景に描かれた、建物の裏手、後陣の後ろのあたりが、ちょっとした広場になっている。僕が着いたとき、まだ低学年らしい大勢の子供たちが、そこに散り散りばらばらに座りこんで、写生をしていた。

引率のまだ年若い女性の先生が、ひとりだけ立ちあがって、高い声を張り上げながら、ゴッホの話を聞かせていた。しかし、子供たちには、そんな面白くもないことよりも、すぐその後にひかえている待望の昼御飯のほうが、はるかに興味がある。日本の子供たちと同じように、隣同士の友達と、思い思いに持参した弁当とデザートのお菓子のことを、小声で話しあっていた。でも、ごくわずかながら、先生の顔を見上げるようにして、話を聞いている生徒もいる。どこにでも、生真面目で、几帳面で、お利口さんの人間はいるものだ。 まだ年端のいかぬ彼らにとっては、ゴッホといっても、はるかに縁の遠い存在だろう。まして、どこと言ってとくに変わっているわけでも、またそんなに立派でもない、むしろおよそ見栄えのしない、この田舎町の教会を、世界中に有名にしたゴッホという人物を、神の教えに背いて自殺したという理由で、この教会の聖職者たちが、葬儀を拒否した過去の事実や、その意味合いなど知るよしもなかろう。

ゴッホの葬儀の一件は、僕の胸にはひどくひっかかるものがある。そう、だがそれもゴッホには似合いかも知れない。人一倍、みずからの罪の深さを自覚していた、あわれな異端の背教者には、黒衣の聖職者たちの、勿体ぶった祈祷などいらない。ゴッホが愛し、ゴッホを愛した近親者や友人たちの祈りで十分だ。

ゴッホの絵で描かれている空は、ほんとうに濃い蒼の色だ。僕が訪れたときも、空は雲ひとつなく晴れあがっていた。しかしむろん、ほんものの空が、こんなに濃い色をしているわけではない。パリの郊外の、ごくふつうの、さわやかな六月の、すこし白っぽい、薄い空色だ。

この絵を見ていて不思議に思うのは、教会の階下の日陰の窓が、コバルト・ブルーの空の青と同じような濃い青で描かれていることだ。なぜなのだろう。ガラスが空を映しているためだろうか。そうではあるまい。たぶんそれは、窓が直接空とつながり、空に向かい、青空につづいているからではないだろうか。

教会の周囲をめぐる道が二つに分かれている。ゴッホの絵では、その一方の向かって左側の、教会の表側に通じる道を、一人の女が、重そうな足取りで歩いていく。二つの道に挟まれた中央の部分と、その左手の草むらには、真黄色の花がいっぱいに咲いている。

アルルにいたころ、ゴッホはテオ宛にこう書いている。

「僕の頭のなかでは、色彩によって、青のなかでももっとも強力な青の、青い星夜と、青い

キリストの顔、それに裂けるようなレモン・イエローの天使とが描かれている」（第五四〇信）。

そう言えば、サン・レミで彼が描いたあの有名な「星夜」(Nuit etoilee)でも、糸杉と村の教会の尖塔の彼方で、星が渦を巻いて、蛸の足のようにのびているその背後で、夜空の一部がこれに近い色をしていたことを思いだす。

「オーヴェールの教会」の空の青は、星夜の空の青よりさらにもっと濃い蒼だ。昼だというのに、夜空よりもっと重厚な黒紫の天空そのものが、地上の教会を押し潰すかのようにどんどん沈降してきているかのようだ。まさにすさまじいばかりの蒼。一見深海の青さを思わせるものがあるが、それは窓のほうの群青であって、空の蒼は、やはりゴッホにとっては、イエス・キリストの顔と同じ強烈な蒼、地球の空よりももっと深く、遠い、はるかなる魂の蒼穹の完璧な蒼なのだろう・・・。すべてを飲みつくし、包みこむ蒼、悲しみも、苦しみも、喜びも、怒りも、憧れも、諦めも、そして生も死も溶かしつくす、無限なる存在の蒼、無の蒼・・・。

この絵の救いは、教会の鐘楼の小さな四枚のガラス窓が全部ひらいていることだ。ゴッホそのひとの死に対しては、葬いを拒絶した教会ではあるが、彼が見たかぎりでは、塔の窓は青空に向かって、いっぱいに開いていたのだろう。（現在は窓はなく、鳩の侵入を防ぐネットで、不細工に覆われている）。

長いスカートの女は、どこへいくのだろう。教会の脇の道を立ち去っていく。この絵を描いたゴッホ自身も、その四十数日後にには、人々の眼の前から立ち去っていってしまった。

開いた窓、レモン色の花々、青い青い空。苦悩から解き放たれたゴッホの魂は、窓を抜け、この青い空の、かぎりない海原のなかへ、溶け込んでいったのだろうか。点のように小さい、無数の星々がまたたいている遠い宇宙の碧空の彼方へと・・・。

「絵かきの一生のなかでは、おそらく死はもっとも困難なものではないだろう。僕としては、はっきり言って、それがどんなものか知ろうとも思わない。しかし、いつも星々を見ていると、ちょうど地図上で町や村を表している数々の黒点が、僕をいともやすやすと夢のなかに誘いこむように、僕はすぐに夢見心地になってしまう。僕らがフランスの地図上の黒点にたどりつくことができるように、それに劣らず大空の光り輝く点にだってたどりつくことができると、なぜかしら僕にはそう思えてしまうのだ。」（第五〇六信）。

「　ガシェ医師の肖像　」

Portrait du Docteur Gachet, 1890

「僕はガシェ医師の肖像画を描いている。ひさしのついた白の帽子をかぶり、まじりけのないブロンドの髪、たいへんに明るい顔色、手も明るい肌色、青のフロックコートを着、背

景はコバルト・ブルーで、赤いテーブルにもたれかかっている。机のうえには黄色い本と紫紅色の花をつけた植物のジキタリスがある」（テオ宛第六三八信）「僕はメランコリーな表情のガシェ医師の肖像画を描きあげた。この絵を眺めた人々は、多くの場合、彼がしかめっ面をしいると思うことだろう。しかし、そのように描く必要があるのだ。なぜなら、古い穏やかな肖像画とくらべて、実際の僕らの顔つきに、どれほどの表情があるか、どれほどの情念があるか、そしてどんなに期待と或る叫びがあるかが、それによって理解できるだろうからだ。哀しくて優しい。それでいて明るくて知的だ」（妹ウィル宛。第二三信）。

ゴッホ自身が、テオとウィルへの手紙で、かなり詳しい説明を加えているガシェ医師の肖像画は、傑作中の傑作と言えよう。これは、一九九〇年五月ニューヨークでオークションにかけられ、ある財団によって競り落とされた。「アイリス」や「ひまわり」などとともに、ゴッホの絵がものすごい高額で売り買いされるようになったことで、世間の耳目をあつめることになった。

この肖像画を見たガシェの懇望にこたえて、ゴッホはその後もう一点肖像画を描いた。それが現在、オルセー美術館に飾られている。たしかに、このほうが丹念にしあげられている。しかし、やはりまえに描かれたもののほうが、荒く、力強いタッチが生き生きしていて、ゴッホの特徴がよくでている気がする。

このガシェ医師は、ゴッホにとって最後の、そして最良の友人の一人となった。しかし、ガシェもゴッホもともにきわめて個性的な人物であっだけに、その関係は屈折したものとなった。幸運な邂逅でもあり、また悲運な別れともなった。

ガシェは、マルクスと同じ、一八一八年生まれだから、ゴッホに出会ったときは、すでに七二歳、ゴッホは三七歳、年齢差など問題にならない、こころの通じあう間柄が、すぐに成り立ったようだ（第六三八信）。しかし、最後のころには、何かの思わぬ行き違いが生まれ、しっくりしない関係になりかけていたようだ。

ガシェ医師は、鬱病にかんする著作も残している精神科医であるとともに、オーヴェールに滞在していたことのあるセザンヌやピサロ、そのほか多くの画家と親交があり、みずからもアマチュアながら絵筆をとる、芸術の愛好家で理解者だった。クールベとも親しく、そのクールベが有名な肖像画の傑作を遺したブルードンとも知り合いだった。

一八九〇年と言えば、プルードンの思想とつよくむすびつき、クールベも重要な役割を担ったパリ・コンミューンが壊滅してまだ二十年たらずの時期だ。プルードンやクールベとも行き来があったからには、どれほど密接な関係だったかははっきりしないが、ガシェの胸中には、複雑な思いが隠されていたにちがいない。

ガシェは、数年前に妻をなくしていた。それが彼の憂愁の大きな原因だと、ゴッホは理解していたようだが、彼を変わり者のように思わせた理由は、おそらくそれだけではないであろう。このガシェには、十九歳の娘と十六歳の息子と暮らしていた。このガシェの娘マルグリートの肖像を、ゴッホはなかなかむずかしかったと述懐しながらも、大変こころ楽しく描

いたことを、テオに書き送っている（第六四五信）。

また、ゴッホは、オランダに住む母への手紙（第六三九信）で、ガシェのことを、神経質な人物だと紹介している。その一方、妹のウィルへの手紙では、「まるで新しい兄弟のようで、体質も考え方もとてもよく似ている」とも書いている。同時に、テオへの便りでは（第六三八信）、ゴッホとテオみたいにこころの傷ついた病人だとも評している。

ニューユークの方の肖像につよくこころを、ひきつけられるのは、ガシェのまなざしだ。どこか遠いところを見やっているような、一点に定まらない目のおぼろな光りの奥に、言いしれぬ哀しみと、ある種の諦観がたたえられているように見える。この人の世と、人生のはげしい転変、運命の酷薄を、さらにあえて言えば、ゴッホそのひとの終末を、じっと見据えているような、つらそうなまなざし・・・。

まるでゴッホは、ガシェ医師をモデルにした肖像を描きながら、そこにゴッホ自身の自画像を重ねているみたいだ。「これには、僕がここに向かって出発する前に描いた僕の肖像とおなじような感情がこもっている」と、ゴッホ自身が語っている。ともに風変わりな、別々の悲哀に冒された似たもの同士・・・。

ガシェは、ゴッホを患者としてよりは、純然たる一人の画家して付き合っていこうとしたらしい。自分の家に招いて、庭や室内で絵を描かせたり、本式の御馳走をしたりする。幾皿もの料理が、とくにサン・レミの病院での粗食に慣れたゴッホには、食べ切れない。そうしたガシェの厚遇を、律義で生真面目すぎるゴッホは、負担に感じるところがあったようだ。

その意味では、ガシェの親切と敬意が、かえって仇になったというべきかも知れない。たぶん、ガシェは、別になんらの見返りや返礼をもとめていたわけでもなく、クールベやセザンヌやピサロの場合と同様に、ゴッホという類いまれな芸術家との交流を楽しんでいたのだろう。そうしたガシェの無償の厚意を、そのまま受けながすことがゴッホにはできない。何かの形で、酬いなければとのゴッホのあせりが、二人のあいだに微妙な影をおとすことになっていったようだ。あるいは、すこしでも気がひけるように思えることを、ゴッホは極度に嫌ったのかも知れない。

テオ夫妻をパリに訪ね、つよい衝撃を受けて帰ったきたころに、書いたものと思われるテオ宛の手紙（第六四八信）で、ゴッホはガシェにかんして謎めいた言葉を残している。「ガシェ医師にたいしては、まったく当てにしてはならないと僕は思う。第一に、彼の様子では、彼は僕以上に病人だ。あるいは、まさに同じほどの病人ということにしておこう。ところで、ひとりの目のみえないもが、もうひとりの目の見えないものの手を引いたら、ふたりとも穴に落ちてしまうのではないだろうか」と。

資料が乏しいので、どういう事情だったかについては、知るすべもないが、たぶんアルルでのゴーギャンの場合と同じようなことが起こってしまったのだろう。ゴッホのほうからの一方的思い入れと、期待どおりの反応が得られないことへの激しいいらだち、失望、そして挫折・・・。自分に好意的に応対してくれる近しく、親しい人間への反発、それが高じての

恨みということから言えば、やはりそこに幾分病的な神経の乱れを、読みとることができるのかも知れない。

オーヴェールにもどって、ゴツホは早速ガシェを訪ねていったようだ。しかし、留守で会うことができない。ただそれだけのことを、どうも深刻に受けとってしまったようだ。やはり、それほどまでにパリでの出来事が、ゴッホの精神をふかく傷つけていたのだろう。神経的に参ってしまっていたゴッホは、医師たるガシェに救いをもとめたのかもしれない。ゴッホは、たまたまの医師の不在が、自分にたいする拒絶のように、思い込んでしまったのではないだろうか。

ガシェもかなり憂鬱でメランコリーな様子をしているように、ひごろからゴッホは感じていたようだから、ゴッホはガシェのふるまいやそぶりのうちに、患者を確信ありげに導く、頼りがいのある医者というよりは、みずからも人生に悩み、惑い、芸術を愛し、芸術の世界に耽溺している、病める、妥協を好まぬ、一徹の、変人のような老人の姿を見る思いがしたのだろう。

もしかすると、ゴッホの才能とその作品に魅せられていたガシェは、ゴッホを患者としてケアーしなければならない医師として立場を、いくらかないがしろにしていたのかも知れない。また、みずからも芸術家肌で、しかも思索的な独特の頑固な資質が、それに輪をかけて過敏な、しかもどこかで兄弟のように似かよったゴッホと、真っ向からぶつかりあうことになってしまったということも考えられる。まずいことに、二人はある絵のことで衝突したらしい。

神経がささくれだち、追い詰められたような気持に落ち込んでいたゴッホは、ますますいらだち、向かっ腹をたて、ガシェに反発し、みずからさらに失望をふかめる。ガシェを、病人と感じていたゴッホが、もしもその憂愁の病が、ほんとうのところどこからくるのか、その失意と苦悩が何に因るのか、さらにはガシェの思想や信条、人生観や世界観を、十分に洞察することができ、またそれを知る機会があったら、おそらくもっと違った関係が保てたことだろう。

最終の局面に達してしまっていたゴッホには、とてもそれだけの気持の余裕はない。その用意もない。そのための時間も残されてはいない。破局とは、こんなふうにして、ちょっとした誤解やつまづきを発端にして、まるで不可抗力的でもあるかのように起こってきてしまったりするもののようだ。

確たる証拠があるわけではなく、僕のたんなる憶測にすぎないが、ガシェは若いころ、何かの社会的事件とかかわって、苦い経験をなめたことがあったのではないだろうか。あるいは、それは純粋に個人的な事柄だったかも知れない。ガシェとその子供の年が五十歳以上もはなれていること、娘のマルグリートの生まれたのが、ちょうどパリ・コンミューンのころ(一八七一年)だということから、ふとそんな連想が浮かんできてしまう。彼の憂鬱の背景には、何かがありそうだと、僕には思えてしかたがないのだ。

エキセントリックな人物とみなされたガシェの、いくぶん変則的な、しかし多分に老成した友情、その専門的見識をもってしても、彼以上に屈折したゴッホの自殺をおしとどめることはできない。それを予知することすらできない。最後の十日あまりの時期は、どうもお互いの行き来さえ途絶えたままだったようだ。

ゴッホが抱え込んでいた困難と苦悩は、もはや、個人的力量ではどうすることもできない、何びとの対応をもってしても解決すべくもないものになってしまっていたと言うほかあるまい。ゴッホが全身ではまりこんでしまっていた、その根本のもろもろの条件が、劇的にでも好転しないかぎり、こころに死を決し、死を急ぐゴッホの歩みを変えさせることはできない。これもまた、運命とよぶべきものなのか・・・。

拳銃で打ち損じはしたものの、たまが心臓近くに残っている重傷のゴッホを、初めに診たのは、地元のオーヴェールの医者だったと言われている。(呼びにいっても、日曜日のこと、不在だったとの説もある)。ゴッホ自身の依頼で、問題のガシェがやってくる。　おそらく、ガシェは自分を招いたゴッホの真意を、直観的に了解し得たのだろう。ゴッホが死ぬほかないと思い詰めていることを、察知したこの老医師は、そのゴッホの願いをかなえるべく尊厳死の途をえらぶ。傷の簡単な手当をしただけで、それ以上の手立てをとらない。それどころか、出血とショックで心臓が弱っていること熟知しながら、翌日ゴッホの求めたタバコを、止めもせず、あえて吸わせる。自分もタバコ好きだったガシェは、ゴッホに好きなだけ吸わせてやりたかったのだろう。それがガシェのゴッホにたいする、最後のせめてもの友情だったように僕には思えてならない。

なぜゴッホ自身が、まったく当てにできないとまで極言していた、信用できないはずの医師、仲たがいがあったらしいガシェを、わざわざ呼び寄せたのだろうか。ゴッホは、医師としてのガシェではなく、芸術を理解することのできる人間としてのガシェに期待したのだろう。どこかで、変人のガシェならば自分の欲していることを分かったうえで、ギリギリのゴッホの意志を尊重して、死なせてくれると思ったからではないだろうか・・・。　ゴッホの臨終の後、ガシェは、死の床によこたわる若き友の姿を素描したと言う。ガシェはたった二カ月そこそこで、このかけがえのない友を喪ってしまったのだ。ガシェは、声をあげて泣きくれたという。世間では、ガシェの振る舞いと冷たい態度を、非難するひとが多いようだが、むしろ年老いたガシェの哀しみのふかさに、思いいたるべきであろう。　そのゴッホの遺骸のまわりには、彼の使い古した画架や折りたたみの椅子や絵の道具類が並べられていた。またオーヴェールの真夏の野に咲いた黄色いダリヤ、それにゴッホの大好きだったひまわりの花など、色とりどりの花々が、いっぱいに飾られていたとのことだ。そして、壁という壁は、ゴッホの絵で埋め尽くされた。

六月二十四日の手紙(第六四四信)によれば、サン・レミの病院で描いたあの「星夜の糸杉」や「アイリス」も、オーヴェールに届いたということだから、たぶん壁にかけられた絵のなかには、これらの作品もあったことだろう。なんとつましい、またなんと豪華な弔いだ

ろう。

あの「オーヴェールの教会」は、自殺したゴッホにたいして、柩車を使わせることさえ許さない。そこで、事情を知らない別な教区から、やっとのことで柩車を借りることができたという。特別の弔いの儀式といったものもなく、ゴッホの棺は、その柩車にのせられ、暑い真夏の日差しのなか、馬にひかれて、真っ赤なヒナゲシや紫のアザミなどが咲いている麦畑のあいだのデコボコ道を、村はずれの墓地まで運ばれていく。

ガシェ医師は、新しく掘られた墓穴のまえで、こみあげる嗚咽で声をつまらせながら、ゴッホに別れの言葉を贈る。

「彼は、まごころある、気高い人間、偉大な芸術家だった。彼の知っていた目的は、ただ二つ、人間性と芸術、それだけだった。彼がなによりも大切にし、彼の名を生かしつづけるであろうもの、それは芸術だった」。

その冷えきった遺骸に土がかぶせられ、大地へと還っていくゴッホを見送った人々は、弟のテオ、その妻側のただひとりの近親者、オーヴェールで知りあったわずかの人々、パリから駆けつけてきた画家のベルナールやピサロなど何人かの絵かき、それに画材・絵具商のタンギーじいさん・・・、数はけっして多くはなくとも、それはみなゴッホをよく知り、ゴッホを愛していた人たちだ。

この世の中、どこかにはかならず、ほんとうのことが分かっている人、分かってくれている人がいるということだ。たとえ、全部が全部、おたがいに通じあえるものではないとしても・・・。しかし、このガシェ医師の言葉を、なんとしても、もっと早く、ゴッホが生きているあいだに、彼に聞かせたかったと、僕には思えてならない。

ゴッホは、人間たること(l, humanite)と画家たることの高さ(l, hauteur)を、その苦難の生涯を通じて全うした。その高さが、画家としての生命をはぐくみ、またその高さが、人間としての生命をちぢめた。

あの「カラスのいる麦畑」の遠い空にわきあがっていく二つの雲は、その高き誇りの象徴であろう。

しかし、それは真っすぐにはのぼっていかない。地平線上の大地に身を投げだし、伏せるようにしながら、すこしずつ、すこしずつ、天をめざして、よじれ曲がってのぼっていく。糸杉のように・・・。それがゴッホなのだと、僕は思う。

「カラスのいる麦畑」その一

Champ de ble aux corbeaux, 1890

ゴッホはくりかえし、くりかえし麦畑を描いた。絵を描きはじめたころにも、アルルでも、

サン・レミでも、そして終焉の地、オーヴェール・シュール・オワーズでも。

しかし、数ある麦畑の絵のなかでも、いささか月並みな話ではあるが、なんといってもこの麦畑のうえをカラスの群れが、不気味に飛んでいる横長の絵がとくに印象的だ。前景で太い三本の道が麦畑を切断している。これもまた三叉路の分れ途。

しかも、真中の道は、奥にむかって急に細くなっていき、途中でぷっつり途切れてしまっているように見える。行き止まりの道・・・。もう一歩も先に進むことができない。そのため、だれしもがこの絵を、彼の自殺と結びつけて考えたくなる。この絵はけっして彼の最後の作品ではなく、これを描きあげたあとにも、少なくとも七、八点以上の絵を、ゴッホは描いた証拠があると言われても、やはり死のイメージを連想して、頭から暗い絵だとみなしたり、そのように思いこんでしまう。でも、ほんとうにそうだろうか？

僕がこの絵が描かれた場所と推定されている麦畑のあたりを、歩きまわったときは、すこぶる上天気で、しかも真昼間だったせいか、カラスの姿は一面の畑のどこにも見当たらなかった。六月下旬のまさにのどかな麦の秋。すでに一部の畑では、刈り取りが終わっていた。

しかし、ゴッホと弟のテオの墓がある村はずれの墓地の周辺では、まだ黄金色に実った麦が、はるか遠くのほうまで広がっていた。その畑で、雛を育てているヒバリがいそがしく飛びかっていた。麦のあいだから突然飛びあがり、穂先すれすれにかすめて、はるか彼方へと去っていく。かと思うと、どこからか舞い降りてきて、さっと姿を麦の茂みのあいだに隠す。

そのヒバリにまじって、都会から遠足にやってきた小学生たちが、もの珍しいのだろう、麦畑の奥ふかく入りこんで、跳んだりはねたりたりして大騒ぎしていた。背高の麦の穂のあいだに、はしゃぎまわる子供たちの姿と、飛翔する小さなヒバリの姿が見え隠れし、甲高い人間の喚声と、早口のヒバリのさえずりが交錯しながら、にぎやかに聞こえていた。　この絵を恐ろしげに感じさせるのは、たぶん空のあわただしい雲ゆきにも関係している。嵐を呼ぶような黒い空、わきあがる二つのに入道雲。しかし、パリに滞在したことのある方なら、すぐ思い出すことができるように、これはあのあたり特有の夕立直前の風景だろう。黒雲がみるみる猛スピードで近づいてきて、アッと言うひまもなく、上空が完全に真っ暗になってしまう。そして降りだす雨。しかし、ものの三十分か、ながくとも一時間もすると、暗い雲が走りぬけていって、ウソのような青空がもどってくる。

東京付近の遠く西の彼方に、入道雲が見えてから降りはじめるまでの、気をもたせるような長い時間、雷鳴が聞こえはじめ、黒雲が動きだしてからも、なかなか雨が落ちてこない、じれったい待ちぼうけの時間・・・。こんどは、いざ降りだしたとなると、しばらくは降りつづく、ジメジメした、しつっこい夕立とは、性質がかなりちがう。たいていは、一過性の陽性な雨だ。相当はげしい降りでも、雨があがると水分が急速に蒸発して、空気も大地もたちまちのうちに乾いてしまう。

この絵は、たしかにどこか不吉な感じを呼びおこす。しかし、暗い空とか、カラスの群れとかの、画面の素材から受ける印象を、そのままゴッホの自殺に当てはめるのは、どうかと

思う。彼の死を、悲劇風に、いたずらに陰々滅々たる気分で色づけるのは、むしろやめにしたほうがいいような気が僕にはする。ゴッホ自身の気持からずれるように思えるからだ。妙な言い方だが、それではゴッホがまったく浮かばれなくなってしまうではないか。　実際に彼自身は、がんらい死をそんなに暗いものとも、また厭うべきものとも考えていなかったようだ。彼は個人の有限な生を超えた永遠の生を信じていたふしがある。彼は、あの強烈な色彩と、その色彩の震えや回転やねじれや捻転の独特の躍動を通じて、永遠的なものを表現しようとしていたようだ。そして、どこかで彼自身、その永遠に触れていたと言えるのではないだろうか。

キリスト教の信仰を失っていたから、こともあろうに自殺したのだと言うひともあるようだ。しかし、その種の議論は、彼には当たらないように思える。まして、自殺のすえ地獄に堕ちるなどいう心配は、おそらく微塵も考えつかなかったことだろう。なぜなら、彼にとっては、ある意味でこの世が地獄でもあったからだ。

描いても、描いても絵は売れない。世間のひとばかりではない。父親をはじめ故郷の人々も、ほとんどの美術批評家も画商も、彼の絵を認めようとはしない。自分ではどうすることもできない神経の発作や、一時的な精神の錯乱が何度も襲ってくる。貧乏暮らしの明け暮れで、ときには何日も絶食に近い窮乏の状態がつづく。弟テオのまさに献身的な援助には、感謝するばかりだったが、それでもなにかの都合で、ときに送金がおくれたり、賄いきれなかったりして、食べものを買うおカネにもこと欠くこともある。ゴッホはその比較的短い絵かき時代に、ひもじさと栄養失調にも耐えて、じつに千点を超えるほどの作品を描きつづけたのだ。

「いまのところ、僕はまだ君から受けた便宜に値するようないい絵をうみだしてはいない。でも、それに値するいい絵ができたときには、まぎれもなくそれらは、僕とまったく同様に、君がつくりだしたものだ。と言うのも、つまり僕と君、その二人で制作しいるということだから・・・。」（第五三八信）

ゴッホは、あいかわらずいつも真面目だ。

「絵かきはみな、労働者のように生活しなければならないというのは、本当ではないだろうか。ひごろ大工だって、鍛冶屋だって、絵かきよりももっとひじょうに多くのものを、生産しているのだ。」（第五五二信）

ゴッホにとって死のイメージは、喪を象徴する糸杉とか、真っ黒なカラスとかにはかさならなかったようだ。（西洋では、一般にカラスはかならずしも、一概に不吉な鳥ということではないようだ。可愛いらしい童話的カラスの話もたくさんある）。彼にとっては、麦の実った黄色、そして刈り取りの風景、それこそ死を意味するものであったらしい。

黒でも、緑でも、青でも、灰色でも、赤でもない、黄色こそが死の色なのだ。なぜなら、麦が稔ると、その麦は根こそぎ刈り取られてしまうからだ。たわわに実った麦の光り輝くばかりの豊穣さのなかにひそむ死・・・。しかし、同時にそこには、復活と再生の希望も含ま

れている。黄色は、神聖な光りの象徴でもあるのだ。ようするに、死は終わりなのではなく、むしろ新しい始まりでもあるのだ。

「ひとの一生の身の上（histoire）は、麦の身の上と同じことのように、僕には思える。もしも芽をだすように大地に蒔かれなかったら、どういうことになるだろう。パンになるように粉に挽かれてしまう。幸運と不運の差だ！　どちらも必要だし、有用だ。そして死もしくは消滅、そして生命についても・・これはまさに相対・相関的（relatif）なことだが・・同様だ。」（第六〇七信）

それにしても、ゴッホは、オワーズに移り住んでからわずか二カ月そこそこの、七月二十七日ーーヒマワリの咲く盛夏のまっただなかに、なぜみずからの生命を終わらせることを思いたったのか・・・。むろん、真実のほどは、だれにも分からない。しかし、この行動は、発作的なものでも、狂気の錯乱によるものでもないであろう。むしろ、よくよく考えたすえの選択であり、決断であったとみなすべきであろう。

使用した拳銃についても、従来ゴッホが泊まっていたカフェ・ラブーの娘の証言や手記にもとづいて伝承されて来たように、たまたま何日かまえに、写生の際、うるさいカラスを追い払うために使うという名目で、ラブーの家にあったものを、借りたのではなく、オワーズに近いポントワーズの街中の銃器販売店ルブッフLeb-ufで、ゴッホ自身がわざわざ買い入れていた事実から見ても（『Vincent Van Gogh Correspondance Generale』p,743，Gallimard 1960，Par notes de Georges Charensol』）、かなり以前から一つの選択肢として考えていたものと推察される。

ゴッホの自殺の直接的な動機をめぐっては、いくつかの説がある。発作が再発し、病気がさらに進行・悪化して、完全な狂人になり、絵も描けない廃人となることを、苦にしたのだろうという解釈。結婚もし、子供も生まれた弟から、予想外にも兄貴も自分のように身を固めてはと勧められ、次第にテオからの仕送りが先細りとなり、いわゆる糧食の道が途絶えて、生計が成り立たなくなっしまうのではないかと、生活の先行きを極端に怖れたためだろうという解釈。逆に弟に負担をかけていることへの「罪」の意識。絵が評価されないことへの落胆、落伍者的敗北意識。さらにもっと奇天烈なものは、ガシェ医師の十九歳の娘への求婚にたいする、一家をあげての反対と拒絶への失意とするもの等々・・・。　しかし、これらの有力視されているものや突飛な説のいずれも、いまひとつシックリしないものを、僕は感じないではいられない。ゴッホが、それくらいことでへこたれて、自殺してしまうような「弱い」精神の人間であるとは、僕には思えないからだ。

僕なりにいろいろ考えて見ると、彼の自殺の謎を解く鍵は、やはりテオとの関係にひそんでいるような気がする。

前年の四月、ゴッホがサン・レミの病院に入る少しまえに、テオは結婚している。翌年一月、つまりゴッホが亡くなる半年ほどまえに、テオと妻のヨアンナ（ヨー）のあいだに男の子が生まれる。伯父の名をとって、フィンセント・ウィレムと名付けられる。むろん、ゴッ

ホは、弟の結婚についても、子供の誕生についても、再三にわたって祝福を贈っている。
しかし、この結婚のよって、ゴッホとテオのあいだに、微妙な変化が生じたであろうことは疑いない。当然のことながら、テオが自分の家族のほうに関心を移したその分だけ、兄弟のあいだに距離ができたことはまちがいない。もっと言ってしまえば、大事な弟を、その妻と子供に取られてしまったという思いが、ゴッホのこころの片隅のどんな陰の部分にも存在しなかったと言ったら、あきらかにウソになるだろう。親子の場合だって、それは同じことだ。でも、そのこと自体は、けっして耐えられないはずはないことだし、むしろ耐えねばならない性質のことがらだ。

たしかに実際に、ゴッホは、テオが新婚旅行に出掛けていったあいだに、それまで毎週定期便のように届いていた手紙と画材の入手が、滞ったことに苦情を述べてはいる（第五八四信）。しかし、この手紙には、アルル近郊の果樹園を描いた有名な作品の習作が添えられていて、一連の六点もの大作にとりくんでいることが語られている。この場合、額面どおり絵具や画布の手持ちがなくなってしまったことが、彼の不満の主な原因であったと考えてもよさそうだ。

おそらくその際、ゴッホがある種のやる瀬ない思いと、たまらない寂しさをかかえていたであろうことは否定できない。それしても、彼はむしろみずからを奮いたたせ、かえって創作意欲をおおいに高揚させて、絵の制作に熱中している。これを、やせ我慢の強がりと見るのは、あまりにも意地悪い見方であろう。したがって、テオの結婚そのことによる心理的トラブルと経済的打撃、それにまつわる二人の軋轢を、あまり誇大視すべきではないであろう。

むしろ、ゴッホにとってもっとはるかに重大な、なんらかの問題がでてきたのだろう。それは、ゴッホがサン・レミからオーヴェールに移る途中と、その後もう一度、死ぬ二十日ほどまえに、パリでテオの妻とその赤ん坊に会い、直接自分の目で、テオ一家の生活ぶりを見たことにかかわっているよな気が僕にはする。

ゴッホがはじめてテオの家庭を訪ねたときの模様を、テオの妻のヨーが書き記している。「ゴッホとテオの二人の兄弟は、目に涙を浮かべながら、眠っている赤ん坊を、じっと見つめていた」と・・・。複雑な思いが衝撃となって、ゴッホの胸を走りぬけていったにちがいない。

ゴッホは、自分と同名の甥を腕のなかに抱いて、新しい肉親の誕生と成長のかたわらに、一つの決定的な時の終わりを感じたのではないだろうか。なにか自分の仕事の過半をなし了えたという実感、それは一種の寂寥感であると同時に、脱力感しくは喪失感でもあったのではないだろうか。通俗的な言い方をすると、それまでしぼりにしぼり、こらえにこらえてきた緊張の弓の手元が、こころのなかで突然ひきつり、萎えてしまったということではないか。出番の停止――終息。

それに、ひごろからあまり体が丈夫でないテオに、赤ん坊も生まれたいま、あいかわらずこれまで同様、重い負担と厄介をかけつづけなければならないことが、兄としていっそうた

まらなく思えてきたのだろう。ゴッホは、パリでテオに会った直後、オランダに住む母親と妹に、テオの咳込みがひどく、体調が心配なことを、書き送っている。

したがって、ゴッホを苦しめていたものは、テオへの「罪責感」などといういかめしいものではなく、ごく自然な肉親の、どうにも忍びがたい「情」であったと言うべきであろう。

こうして、一つの休止符が、そしてまもなく終止符が、ゴッホの胸に記されることになったとでも言えようか。最終楽章の訪れ・・・。

オーヴェールに住みついてから、ゴッホは二カ月間に、おびただしい数の作品を生み出している。毎日二点描くことを目標にして、早朝に起きだして午前中いっぱい、野外で麦畑や家や庭の風景などを、つぎつぎに描きまくっている。言わば、自分に残された生命のありったけを、ふりしぼるようにして、制作に没頭している。

ゴッホは、まるで強迫観念にとりつかれたかのように、描きつづける。ただひとつ救いに思えることは、このオーヴェールでのわずかの時間に、ゴッホとしては珍しく、若い娘の肖像画を何点も描いていることだ。ガシェ医師の問題の十九歳の娘がピアノをひいているところや、泊まっていたカフェ・ラブーの娘などの姿を、明るい色彩で描いている。生涯に二度も、苦く、手痛い失恋をした彼のこころにも、最後になって、青春時代の思い出が、身近なオーヴェールの美しい娘たちを描く気をおこさせたのだろうか。

彼はいつも、それぞれの作品に全力投球して、神経をこき使うので、精神的にもますます疲れ果てていく。以前にも、彼自身テオに宛てた手紙のなかで、作品ができあがった後に、どうしようもない倦怠感と虚脱感が疲労感とともに襲ってくることを、告白している（第五九四信）。それでもゴッホは、くる日もくる日も、キャンバスにむかって、すこしでもいい作品をしあげようと、精進をつづける。

しかし、すでにかなりの心身の疲れが蓄積していた彼にとっては、この懸命な作業の連続は、まさに苛酷な仕事だ。ガシェ医師の診断によれば、ゴッホは以前からずっと粗食暮らしがつづいていたので、慢性の栄養失調になっていたらしいとのことだ。心身ともに芯から疲労困憊していったにちがいない。

彼の絵は、存命中たった一枚売れただけだったと言われている。その年の二月、ベルギーのブリュッセルで、四〇〇フランで売れたという。それが絵をはじめてから彼の得ることのできた収入のすべてだ。それがいま、何億円という高値で売り買いされている。ときには、一片のパンを買うおカネにさえ窮していた彼の手元には、それも届かない。人間のやることといったら、たいてい手遅れで、しかも見当ちがいだ。

彼の血染めの上着のポケットにあった弟宛の最後の手紙（第六五二信。七月二十三日ごろに書かれたと思われる）で、ゴッホは語っている。

「僕は、自分の仕事に生命を賭け、僕の理性は、半ば潰えさってしまった（ma raison y a s ombre）・・・」と。それでも、彼は最後の最後まで絵筆を離そうとはしない。

その仁王のように見開いたマナコを閉ざし、その握りしめた絵筆をもぎ離すには、彼の生

命を断ち切り、彼を殺さなければならない。

ゴッホは、七月二十七日の夕暮、麦畑の真っただなかで、自分の胸板にむかって拳銃のひきがねを引く。

しかし、すぐには死にきれず、二日後まで重傷のまま、自室のベッドで生きつづける。パリから駆けつけてきた彼の最愛の弟、世話をかけどおしだったテオに、ゴッホはオランダ語でつぶやく。「終わりにしたいなあ―(ik wilde dat ik zoo heen kon gaan)」と。

そこにすべてが言い尽くされている。これがゴッホの最後の言葉だ。

彼はどちらの麦だったのだろう。生きているあいだの不運と不幸ということから言えば、粉に挽かれ、パンになってしまったほうかも知れない。しかし、彼自身はそうは信じなかっただろうが、やはり彼は幸運にも、多くの粒のなかから選びだされて、大地に蒔かれた幸福な麦だったと言わなければなるまい。

人が七十年か八十年の歳月をかけて生きるよりも、もっとはるかに多くの生命を、ゴッホは三十七年間の生涯で生き通した。運命のうずまきは、大きく回転する。

ゴッホは、死ぬことによって生き返った。そのみごとな作品とともに、彼の生命は、永遠のうちによみがえり、再生した。ゴッホよありがとう。

僕は、晴れ晴れとした気持で、麦畑の坂道をくだった。うしろでは、子供たちのにぎやかな声とヒバリのさえずりが、明るい昼さがりの陽光のなかで、あいかわらず響いていた。この、子供たちを、ゴッホの、ように、けっして、飢え、させては、ならない。強く、そう僕は思った。

「僕らが芸術に、そして仕事に励むのは、それがたんに僕らの時代に残るためではなく、僕らの後に、それがほかのだれかによって、つづけられるであろうためでもあるのだ。」（第五三八信）

「カラスのいる麦畑」　つづき

Champ de ble aux corbeaux, 1890

ウェイルズのナショナル・ミュージアムに、オーヴェールの雨の景色を描いたゴッホの絵（「雨のオーヴェールの風景」Paysage：Auvers sous la pluie, 1890）が所蔵されている。この絵では、降りしきる雨の様子が、何本もの線で表現されている。版画のような、珍しい、美しい作品だ。静かで、落ち着いた気分の絵だ。この絵の中央にも何羽かのカラスが飛んでいる。

また、比較的よく知られた「雨の日の干し草の山」（Meule de foin pendant un jour pluvieux）にもカラスがいる。「刈り取られた麦の束」（Les gerbes de ble）でも、わずか

ではあるが、カラスが描かれている。ようするに、刈り取りがすんで、麦が干してあったり、落ち穂が散らばっている畑には、かならずといっていいほど、カラスは出没するということだ。

それにしても、「カラスのいる麦畑」では、なぜあんなにたくさんのカラスが飛んでいるのだろう。ゆうに四十羽か、それをもっと超えるほどの数のカラスが、描かれている。僕はそのことが気になってしかたなかった。この絵を取りあげて論じているものは、少なくない。しかし、異様とでも言うほかないほどまでにカラスが多いことについては、とくに触れたものは、寡聞にして僕は見かけたことがない。

しかも、たいていのひとは、カラスはこちらに向かって飛来しているものと理解しているようだ。でも、まるで雁や白鳥の渡りの群れが編隊飛行をしているみたいに、カラスが悪天候のなか、つぎからつぎに整然と畑に降りてくるものだろうか・・・。その点も僕には不思議に思えてしかたがなかった。きっとあれは、何かを象徴しているにちがいない。 僕は、ゴッホの画集を開いたまま、何日も何日も眺めつづけた。朝起きてから夜寝るまで、食事をしているさなかにも、まるでこの絵と睨めっこをしているみたいにして暮らした。それでもなかなか答えは見つからなかった。いくら考えても、その意味がのみこめなくて、しまいには、ジリジリしてきた。いったいゴッホは、何が言いたかったのだろう？ そこで僕は改めて、ゴッホの手紙を、念をいれて読みかえしてみた。

ゴッホの埋葬後、彼の部屋で、上着のポケットにはいったまま、テオによって発見されたゴッホの言わば最終の手紙は、七月二十三日の第六五一信と出だしの部分の表現が、ほとんど重複している。これは投函しなかったというよりは、途中まで書いてやめてしまった書きかけのようなものだったのかも知れない。

しかし、実際に出したほうも、この出さなかったほうも、ともに注目すべき心境が吐露されている。「いろいろなことについて書きたいが・・・」と前置きしたうえで、「その気がすっかりなくなった(l, envie m en a tellement passee)」(第六五一信)とか、「無駄だと思う(j, en sens l, inutilite)」(第六五一,二信共通)とかいうつきはなした言い方がなされている。

もう今更くどくど言ってみてもしょうがない、とりかえしはつかないというような、一種の断念と、切迫しているぬきさしならぬ事態にとっては、なんの救いにもならないといった、ゴッホの腹を据えた気持がうかがえる。

ポケットにあったほうは、文面が途切れてしまっている。しかし、絵の商売の話が主要な関心事としてクローズ・アップされている。自分の絵が売れないこと、テオの商売もゆきづまっていること、そうしたことを、しきりに気に病んでいる様子がせつせつと語られている。

「僕が知っているかぎり，君は画商のなかいる人間ではない。君は事実、人間性をもって行動しているのだから、同じ味方同士でありうる。僕にはそう思える。ところで、君はいった

い何がしたいのだ？・・・・」　ゴッホの最後の手紙は、きわめて暗示的な言葉で中断されている。

投函されたほうの七月二十三日の手紙を子細に読んでみると、すでにゴッホが、みずからの死を覚悟していたことが推察できる。たとえば「ふりかえってみると(en revenant)僕にはそんな風に思えるのだが、画家たち自身は、しだいに抜きさしならない窮地に追い込まれている(les peintres eux-meme sont de plus en plus aux abois)」という文句が記されている。言い方としては、第三者的に画家たちそれぞれがめいめいに、たいへんな困難に直面しつつあるとの間接的な話になっているが、じつはゴッホ自身のことを一般論に託して述べたものと解して差し支えあるまい。

この文の後半のsont‥aux aboisのところは、もう手の施しようもなく、万策尽き果てた、絶体絶命の、瀕死のピンチに陥ってしまっているというほどの意味の言葉だ。

どこにも自殺の気配はなく、手紙からもそれを匂わすものは何も見当たらないと、ふつうには言われている。しかし、この文面の行間からは、あきらかに死の予兆を見て取ることができるのではないだろうか。この手紙は、もう死ぬほかないとこころを決めたゴッホの、ひそかな訣別の便りであり、テオにたいする、無意識のうちのＳＯＳの発信だったのではあるまいか。

ゴッホの手紙の「ふりかえってみると」とか、いろいろ考えていることはあるが、「書く気がなくなった」とか、「窮地に追い込まれている」とかの表現は、これを書いているゴッホ自身が、すでに自分が死にゆきつつある時点に立って、この今をひとつの過去としてふりかえって考察していることを、示しているとも言えよう。

しかし、なんと言っても、一番問題なのは、自殺の十日ほどまえごろに書かれたものと推定される第六四九信の内容だ。

ゴッホは七月六日、パリにテオの一家を訪ねていく。そこでゴッホは、最悪とでもいうべき事態に遭遇する。ゴッホが目撃したのは、仕事のこと、暮らし向きのことに悩んでいる弟の様子であり、病気の重い赤ん坊を抱えて狼狽し、睡眠不足と心労で、ひどくやつれた彼の若い妻の姿であり、乳があわなくて消化不良に苦しむ幼い甥の深刻な容態だった。　テオの話によれば、彼が力をいれて扱っている作品は、ゴッホだけでなくほかの印象派の画家もふくめて売れ行きが、かんばしくない。そのため、彼が勤めているブッソ・エ・ヴァランド商会の経営者は、テオを罷めさせたがっている。できれば独立して自分の店を開きたいのだが、実現は財政的に無理だ。いっそ自分の住んでいるアパートの部屋を、画廊にしてはとも考えてもみるが、足場の悪い五階の部屋では、うまくいきそうにない。どこかほかの適当な場所へ引っ越すほかない。テオはどうすべきか、たいへんに迷って、精神的にも落ち込んだ状態になっている。そのうえ、彼の妻ヨーと赤ん坊の具合もよくない。　ゴッホ自身、気分が下向きになっていた折りも折り、訪問の時期が悪く、それが結果として、ゴッホにとって不運だったと言わなければならない。ゴッホが受けたダメージは、強烈だったに違いない。

オーヴェールにもどったゴッホのところへ、数日後ヨーとテオからの手紙がとどく。赤ん坊が危機を脱して、恢復にむかっていることを伝える便りだったようだ。それにたいするゴッホの手紙は、胸を打つ。

「あなたの手紙は、僕にとって、ほんとうに一つの福音、不安からの解放でした。僕とあなたがたみんな、不安で、すこし辛く、苦しい時を送ることになりました。あなたがた二人と、僕はその不安をともにしていたのです。危険にさらされている日々の暮らしの苦労は、僕たちが一緒に受け止めるならば、たいしたことではありません。(中略)ここに戻って来て、僕は僕でやはり、あなたがたを脅かしているのと同じような災厄(l, orage)が、僕を哀しくさせ、僕に重くのしかかりつづけています。いったいどうやったらいいと、あなたがたは考えますか・・・。僕はいつも上機嫌でいたいと思います。でも、僕のばあい、僕の生命それ自体が、根元そのものから傷み、僕の歩みはよろめいています。丸まる全部というわけではないにしても、いくぶんか気がかりだったのは、僕があなたがたのお荷物になっているのではないかとの心配でした。でも、ヨーからの手紙のおかげで、その疑いは晴れました。僕のほうだって、あなたがたち同じように仕事をし、苦労をしていることを、あなたがたがよく理解してくださっていることが僕にもわかりました。」

ここでゴッホは、テオ夫妻の親身なおもいやりと親切に感謝しつつ、自分の一身の困難さが、テオたちのそれに匹敵するほどのものであることを、誇りをこめて書き記している。しかし、そうは言っても、ゴッホの本心は、事実上、テオとヨーにとって、自分の存在があまりにも重荷すぎるものだし、いつまでも難儀をかけつづけることは、実際に無理で、不可能なことだと、どこかできっぱり判断したものと察しられる。

「そこで、僕はここに戻り、仕事を再開しました。しかし、絵筆を手から落としかけたのですが、自分で何をしたいのかが分かっているので、それからまた三点の大きな絵を描きあげました。それ(らのうちの二点)は、曇空のもとの広々とした麦の絵です(bles sous des ciels troubles)。僕は思うがままに、哀しみと孤独の極みを表現しようと努めました。(中略)これらの絵があなたがたに言おうとしているものは、言葉では言いあらわせませんが、僕が田舎で出会う健康なもの、ひとを元気づけるものです。」と、彼は書き綴る。　しかし、彼のこころを去来したものは、絵を描きつづけるのとは、別なことをやるべきではないか、との思いだったらしい。かつて外人部隊に入ることを考えたように・・・・。だが、もはやゴッホには、そうした気力も体力も時間も残ってはいない。それに、いくら売れないとは言え、絵を描くことを、みずからの天職だと信じてきた彼の誇りと、絵への愛着、執着が方向転換を許さない。

「いま僕がすくなくとも感じていることは、後戻りするにも、他のことを欲するにも、年をとり過ぎてしまったとの思いです。他のことをしようという気はなくなりました。たとえ、道徳的苦痛が僕に残るとしても・・・・」(同第六四九信)

どうやったらいいと、あなたがたは考えますか?との問いにたいする、ゴッホ自身の答え

は、一つの結論に収斂していく。

そうしたせっぱつまった思いのすえに、ポケットに入っていた手紙の最後のところで、彼自身以前に経験ずみの、雇われ画商の商売のむずかしさのなか、病弱な赤ん坊を抱えて、一生懸命頑張っているテオへのいたわりと共感、それにテオにしても自分にしても、まさに真人間として、人間的に生き、働き、芸術の仕事に献身してきたことへの、精一杯の矜持が語られることになったのだろう。

ゴッホは、はっきり芸術家としての生命と生活を、みずからの手で終わらせることを、考える。こうなったら、残されている途は、もうそれしかないではないか、たぶんそう彼は考えたのだろう。

この手紙で、彼が描いたと述べている二点の大作については、ふつうそのうちの一枚が例の「カラスのいる麦畑で」、もう一枚が現在アムステルダムのゴッホ美術館に、これと並んで飾られている「夕立の空のもとの麦畑(Champ de ble sous un ciel orageux)」であると、ほとんど疑いもなく信じられてきた。しかし,はっきりした特定は困難に思える。

この手紙で他の二点と一緒に描いたとされる「ドービニーの庭(Le jardin de Daubiny)」のスケッチが最後の投函された手紙（第六五一信）にそえられている.同時にそれに付け加えられているスケッチは、「カラスのいる麦畑」と「夕立の空のもとの麦畑」ではなく、「曇空のオーヴェールの平原(La plaine d.Auvers avec ciel nuageux)」という表題で,こんにちミュンヘンとピッツバーグの美術館に飾られている二点のほうである.麦の刈り具合から見ても,こちらの方がわずかせよ遅い時期に描かれたものとみなしてよさそうだ。また、「健康なもの、ひとを元気づけるもの」という一見不可解の彼の説明も、この二点のほうが、絵全体の雰囲気から言っても符号しているように思われる。

広々とした畑のむこうに、いくつかの雲のかたまりが、ゆっくり流れている。雨の去った後の、さわやかなオーヴェールの大気の清涼感が伝わってくる。麦は、すでに大半が、刈り取りを終わってしまっている(ゴッホにとっての死の象徴)。畑のわきの草むらには、真っ赤なヒナゲシが咲いている。畑も花も空も雲も、もう躍ってはいない。踊りつくして、ただひとり、ほっと一息ついたとき、雨のやんだ野づらをわたって吹きよせる風が、そっとやさしく肩口から胸元を通りぬけていくような、そんな感じの美しい風景だ。そしてどこか寂しげだ。透明な静けさのなかに秘められた、深い悲しみと孤独・・・・。

涯しなく広がる畑には、大地の営みと生命の息吹がある。刈り取りの済んだ畑には、すでに一面に緑が芽生え、その上をカラスでなく、ヒバリが舞っている。死を包み、死を超えて生きつづける自然の悠久の生命・・・。そこに、ゴッホは、かぎりない寂しさや孤独とともに存在する健康なもの、ひとを元気づけ、勇気づけ、慰め、奮い立たせる、新しい生命の現れを見いだしたのではないだろうか。ゴッホは、それが描きたかったのだろう。　苦悩と悲哀の極限をつきぬけてしまった人のこころには、すでにある種の平安と光明がやってくるもののようだ。

自殺を図り、重傷の状態で自室にもどったゴッホは、翌日、容態を気づかう人々のまえで、黙ったまま、パイプでたばこを吸いつづけている。だれしも、意外で、異様にさえも思い、驚いたようだ。これも狂気のせいだろうか。僕はそうは思わない。これがまさにゴッホなのだ。

図太いというか、無神経というか、自分自身のことになると、身体の痛みなどにも、まるでひとごとのように、無関心でいられる、ものすごい精神の強さだ。彼の絵の、あの荒々しいタッチは、そこから生まれてきたに違いない。

想像して見るがいい！　死にかけているというのに、ゆうゆうとパイプをくゆらしているなんて、すごく楽しいではないか。ゴッホには失礼だが、とても痛快だ。こういう破天荒の、定石に拘泥しない、型破りの、世間の間尺に合わないゴッホが、僕は好きだ。飄々としていて、ほんとうに面白いではないか。笑いだしたくなるほど、愉快ではないか。

もしゴッホが、絵かきなんぞにならず、はじめから田舎町で、幼稚園か保育園の園長さんでもやっていたら、たいへん似合いだっただろう。話好きで、子供好きで、面白いオジさん・・・。想像力ゆたかで、夢にあふれた話を、まるで目のまえに見えるように、鮮やかに、楽しく描きだして、さぞ生き生きと、熱っぽく物語って聞かせたことだろう。

そして、目を輝かせて、ゴッホの話に聴き入っているたくさんの子供たちに取り囲まれながら、狂うこともなく、もっとずっと永生きして、ごくふつうの生涯を送ったことだろう。たとえ、無名のままで終わったにしても・・・。僕には、そう思えてならない。運命とは、じつに苛酷なものだ。

カラスの絵を、何日も見つづけた僕は、ハッと気づいた。分かったと思った。ゴッホは苦笑して、そうじゃないよと言うかも知れない。しかし、僕は自分の考えを変える気はなしない。

あのカラスの群れは、ゴッホの怒りの化身なのだ。彼の内部で、たまりにたまり、抑えに抑え、堪えに堪えた彼の怒り、恨みも、哀しみも、口惜しさも、嫉妬も、苦悩も、痛みも、僻みも、不満も、猜疑も、強迫観念も、コンプレックスも、なにもかもをも含んだゴッホの怒り。それが、一つ一つ、真っ黒なカラスとなって、彼の身体と精神のうちから飛びだしてきたのだ。

波打つ麦畑は、彼の激動の生涯そのものだ。風が麦の穂をなぎ倒して吹きまくる。ねじれ曲がった太くて短い道で、どまんなかからぶった切られ、真っ二つに引き裂かれたゴッホの人生。

世間の無理解、生活上の困難、先行きの閉塞、神経の発作、精神の錯乱、飢え、失恋など・・・、どれ一つをとってみても、あまりにも不条理で、おかし過ぎるじゃないか。彼の怒りが、麦畑に、道に、空に、炸裂した。遠くとどろく雷鳴と、すさまじいばかりのカラスの啼き声は、たぶん彼の胸の奥から聞こえてくる慟哭だ。

彼は、ついに最後の最後に至って、その怒りを、ことごとく、絵のなかに吐きだした。彼

のこころの奥底に巣くい、執拗に、彼自身を内部からむしばみつづけてきた暗闇のイキモノたち、それがあのどす黒い何十羽のカラスの正体にちがいない。

いま、麦畑を離陸したカラスが、大きく旋回しながら、一羽、一羽、また一羽と、つぎつぎに暗い空の彼方へと消えていく。

ゴッホの激情の、深い深い暗黒を突きぬけて飛び去っていくその彼方には、きっとかぎりなく平和な、永遠の晴れわたった青空がひろがっているにちがいない。

黒いカラスは、やがて真っ白になり、イエス・キリストの顔と同じ蒼に染まって飛んでいく。僕はそう信じたい。

行け、カラスよ行け、どこまでも天翔けて行け。